



**New “Artists Today”
Exhibition 2016
Spaces of Creation
Mono-ha to the Art of Today**

新・今日の作家展 2016

創造の場所—もの派から現代へ

横浜市民ギャラリー

横浜市民ギャラリー開館の1964年から40年にわたって開催した「今日の作家展」は、企画に美術評論家を招聘し日本の現代作家の表現を多角的に取り上げ、現代美術のひとつの流れを示す重要な足跡を残しました。表現の多様化に伴い「今日の作家展」は、2006年から「ニューアート展」、さらに2011年からは“創造都市横浜からの発信”というコンセプトを加えた「ニューアート展 NEXT」へと受け継がれてきました。2011年の東日本大震災の影響により一時閉館し、現在の場所に移転・再始動し3年目を迎えた本年、当ギャラリーでは、「今日の作家展」を踏襲し年次展覧会の総称を「新・今日の作家展」として、同時代の美術を紹介していきます。

「新・今日の作家展」第一弾では、既成の価値観や認識からものごとを解放し、ものどもの、ものと空間、ものと身体の限りない連関をあらわす作家たちの作品に焦点をあてます。1960年代後半に現れた〈もの派〉の作家たちは、同時代にスタートした「今日の作家展」を活動の場所のひとつとしていました。事物の存在や関係、それらが置かれる状況や空間自体を作品とし、ものの本質を問い続けた〈もの派〉の思想は、普遍的で根源的な意義を持って語り継がれ、世界と向き合う糸口として今日の美術に脈々と流れています。本展は、「今日の作家展」に出品された齋藤義重と榎倉康二の作品、そして菅木志雄、池内晶子、鈴木孝幸の新作によって構成し〈もの派〉から現代へとつながる“創造の場所”をめぐりながら、つくること・みることの可能性を探ります。

最後になりましたが、本展のためにご尽力いただいた菅木志雄氏、池内晶子氏、鈴木孝幸氏と、関係機関、関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

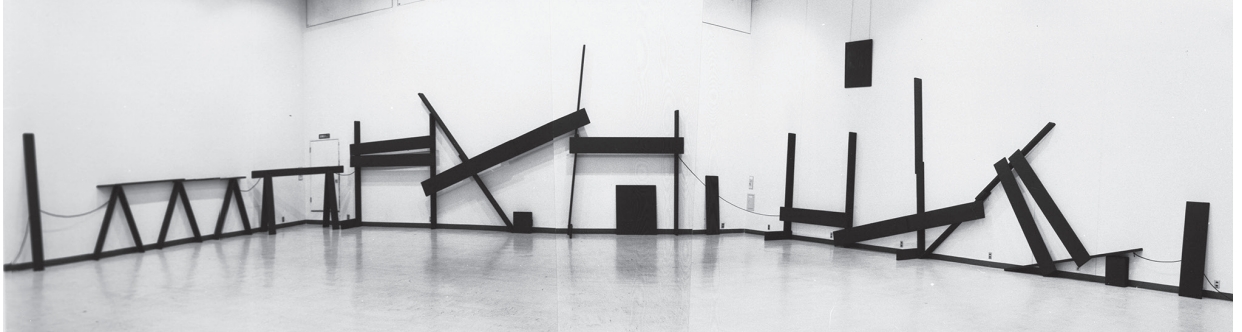
横浜市民ギャラリー

横浜市民ギャラリーが開館した1964年から40年にわたって開催された「今日の作家展」は、日本の美術を取り巻く環境や表現の変容を辿るひとつの足跡を残した年次展覧会です。開催委員に東野芳明や中原佑介、針生一郎ら美術評論家を招聘してスタートし、企画形式を変えながら同時代に活動する作家を紹介しました。様々な人々が企画に携わる中で、榎倉康二と菅木志雄は「今日の作家展」に数多く出品しています。榎倉と菅が作品を発表し始めた1960年代後半の日本は、社会制度が大きく変動し物事の価値観や認識が問い直された時代でした。美術を根源から問い直す試みが広がりを持ってなされる中、日常におけるものの存在に注目しそこから新たな表現のあり方を探ろうとした作家たちの動向は、〈もの派〉と呼ばれるようになります。榎倉や菅も〈もの派〉の中にありながら、それぞれの思想を持って制作を展開しました。

榎倉は、1968年に関根伸夫が発表した《位相—大地》、その後の《空相—油土》に接し、自分自身とそれを取り囲む空間のあり方を学んだと言います。《位相—大地》は、当時の作家たちの動向を〈もの派〉と表すようになった始まりのひとつとされる作品です。関根の作品について榎倉は、「物の存在そのものだけで成立するのではなく、人間の行為や身体的な要素や空間を内包し、また反発し合いながら、なおかつ存在していた。」¹とあたかも自身の制作について語るように評しています。さらに「それを取り巻く動きの中に追従するつもりはまったくなかったし、むしろ批判的であった。それは物そのものを提示すれば作品と成りえるという物の使用の仕方であった。」²と述べています。関根の作品への批判的関心を踏まえ、榎倉は一貫して、「予兆」や「干渉」といったテーマのもと、物事の生成や、身体と世界とのリアルな関係を捉えようとしてきました。

「《もの派》とそうでない造形作品における〈リアルさ〉のちがいを指摘するなら、原因と結果ほどの差がある。《もの派》のそれは、〈原因型〉の〈リアルさ〉であり、そうでない作品は〈結果型〉の〈リアルさ〉であり〈リアルなもの〉である。前者は、ものをタッチする以前から〈世界全体〉としてみているのに反して、後者はタッチした後にはじめて、世界像を結び、それによって、〈リアル〉な場を提供しようとした。どちらが優劣というのではない。ただ、現実の〈リアルなもの〉に、まず衝撃を受け、それを体内化し、さらに異質な〈リアルさ〉を明示したのが《もの派》だったと思われる。」³ こうした菅の〈もの派〉に対する見解は、現実に応答する自らの身体を重視する点で、榎倉の制作にも通じています。また菅は、ものが単体では在り得ず、互いに依存し合い全体と連関している状況を作品として提示しました。複数のものの絶妙な配置や組み合わせによって菅は、普段私たちが知っているものを越えた、極限的な状態を生みだし、そこからものの多様性や複雑さを引き出しています。

Yoshishige Saito



《内部》1981年 ラッカー、木、ボルト、紐 横浜美術館蔵

斎藤義重

斎藤義重（1904–2001年）は、青森県に生まれました。中学生の頃から美術に親しみ絵を描きはじめますが、1920年にロシア未来派の亡命画家たちの展覧会の会場で、展示された作品に描き加える画家の姿を見たことを機に、絵画表現に限界を感じるようになります。1930年代、ロシア構成主義やダダイズムの動向を知ると、絵画や彫刻といったメディアムに属さない造形作品を手がけるようになりました。1960年代前半に、着色した合板の表面に電気ドリルで線や穴を刻んだ連作を発表した後、塗装した合板を切って重ねたり曲げたりするレリーフ状の作品へと移行します。ものとしての存在を強く感じさせるような制作はやがて、作品が設置される空間をも取り込んで展開しました。《内部》は、1981年の「第17回 今日の作家〈壁〉展」^{*1}に際して制作されました。黒色に塗った板を組み合わせ、展示室の壁際に設置したこの作品は、構築の途中のようでもあり、崩れていく過程にも見えます。「大切なのは、頭のなかの空間ではなくそこにある空間。そして、私という存在。存在するということは、私ともとの空間の出会い。だから作品を取り巻く空間も私の作品の一部となる。」^{*2}と斎藤が述べているように、《内部》は意図的に未完成に見える状態を晒し、空間とともに完結することのない制作のプロセスを提示していると言えるでしょう。



*1：企画＝秋田由利

*2：斎藤義重「〔無題〕」、「斎藤義重展」図録、神奈川県立近代美術館、1999年、16頁

「第22回 今日の作家展〈現代美術の黙示録Ⅰ〉」（1986年）
展覧会会場にて 斎藤義重、菅木志雄 撮影：佐藤毅

1964年から1973年まで多摩美術大学で教鞭を執った斎藤義重の元からは、菅をはじめ関根伸夫や吉田克朗ら〈もの派〉に属するとされる作家が輩出しています。斎藤は、自身の制作にも見られるように様々な素材を用いた自由な制作を若い作家たちに促しました。斎藤は、〈もの派〉が現れる以前から、絵画や彫刻といった既存のメディアムの中で何かを表現することから離れ、物質の相互関係やそれらが置かれる空間構造を重視した制作をおこなっていました。斎藤と〈もの派〉の作家たちの間には、単に師弟関係というよりも問題意識を共有する作家としての関係がうかがえます。

池内晶子の作品においても、空間は重要な要素のひとつです。結ぶ、切るという行為を繰り返し、天井や壁などの接点から張り渡してつくられる糸の造形は、明確な輪郭がなく時間と共に少しずつ変容していきます。その変容は、見えない湿度や風圧、重力が糸に反映することから生じています。池内はこのことに関連して、「空間に糸を張り結び合わせていくうちに、糸と、空間と、わたしとが、しだいに一体感を持ち始め、それらは自ずからかたちをつくり始める―。」^{*4}と述べています。典型的な空間を想定してその中に作品を構成するのではなく、素材と空間と作者が一体化し生成することが目論まれていることがわかります。池内は大学で榎倉に学び、榎倉の制作における身体感覚や物質との距離の取り方に影響を受けたと言います。身近な存在であり皮膚感覚に近い糸の集積は、池内の行為によって、繊細でありながら外界と呼応する力強さを呈しています。

もの単体では作品が成立しないことに自覚的な鈴木孝幸は、自身の行為を通じて運び運ばれたものだけではなく、選ばれなかったものや場所が存在することを重視し、より広い世界との関係を暗示するような制作を展開しています。もの、身体、空間の境界を常に問い直すことでそれぞれのリアリティを開示しようとする試みは、〈もの派〉の思想に通じています。海や川、陸、空といった場所に自身の行為を介入することから始まる鈴木作品には、人知の及ばない空間の永続性と境界の曖昧さを見ることができます。

理論的な著作もおこなう菅は最初期の論文の中でこう述べています。「―われわれは時代に挑戦しているのである。観念の流動性と物の変転する思考とがようやくわれわれの日常空間に重複して現出するようになり、物を造るということが何かの完成された表象作用でなく、巨大な漠とした異空間への起点であることに気づくべきである。」^{*5} 本展で紹介する作家たちの制作は、作家の内的な閉じた構造の中に完結することのない外部性を持って展開しています。普遍的な概念やイメージで物事を判断することから離れて、目の前に存在するものや空間の特質、差異を認識すること。その過程に創造する可能性が開かれることを、作品は示唆していると言えるでしょう。

大塚真弓（横浜市民ギャラリー学芸員）

*1：榎倉康二「『もの派とポストもの派の展開』展をみて」、『美術手帖』、第587号、1987年11月、124頁

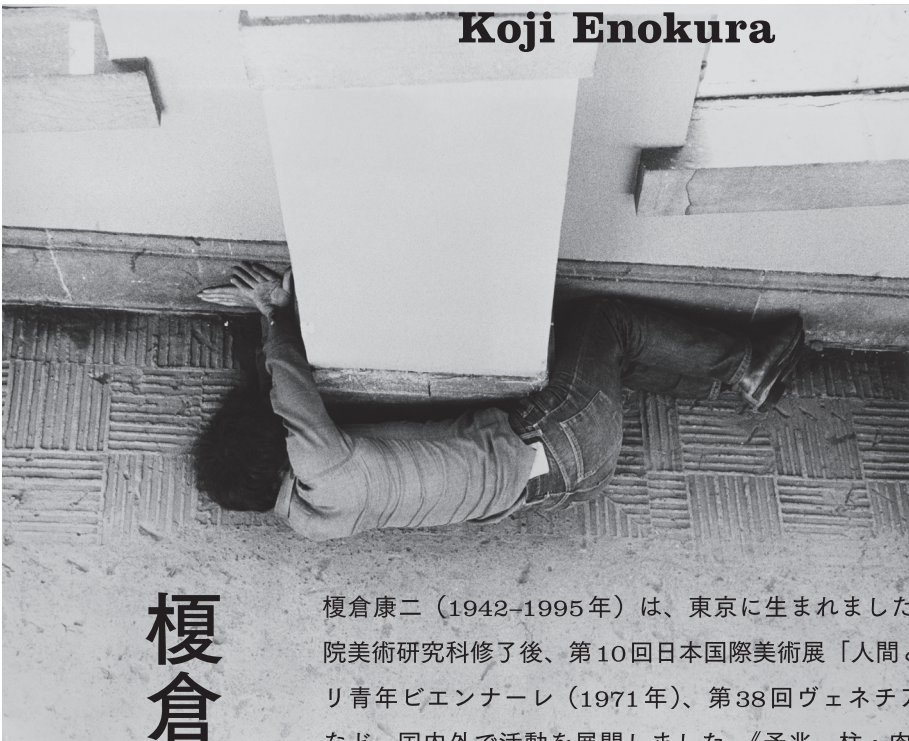
*2：同上、125頁

*3：菅木志雄「遠くにある全体」、『美術館ニュース』（東京都美術館発行）No.437、1993年8月、5頁

*4：池内晶子「〔無題〕」、富山県立近代美術館編集『第6回富山国際現代美術展』図録、富山県立近代美術館、1996年、84頁

*5：桂川青（菅木志雄の筆名）「消滅の起点 物体は物体を否定しながら」、『SD』第62号、1969年12月、53頁

Koji Enokura



左：《予兆—柱・肉体 (P.W.-No.46)》
1972年
ゼラチン・シルバー・プリント

下左：「第15回 今日の作家'79展」
(1979年)《無題》展示風景

下右：《無題》1979年 綿布、油彩
世田谷美術館蔵 撮影：上野則宏

榎倉康二

榎倉康二（1942-1995年）は、東京に生まれました。1968年東京藝術大学大学院美術研究科修了後、第10回日本国際美術展「人間と物質」（1970年）、第7回パリ青年ビエンナーレ（1971年）、第38回ヴェネチア・ビエンナーレ（1978年）など、国内外で活動を展開しました。《予兆—柱・肉体 (P.W.-No.46)》は、当時の横浜市民ギャラリー^{*1}で撮影され、1972年の「第8回 今日の作家'72年展」^{*2}に出品されました。自身の身体を対象に添わせることで、「私」の存在する位置を確認し世界を認識しようとする姿が俯瞰した位置から写されています。カメラの特質を制作に取り入れた榎倉は、「わたしが、物を見ていると同時にカメラ自体も物に接している、だからカメラによって何を撮るか、というよりも、何がカメラに写っているかということの方が、わたしにとって大事な問題であり、カメラの機構としてファインダーという空間の限定性をそのまま出すことによって、ファインダーからのぞかれた世界に無限定に拡大された世界を設定したりすることをやめ、ファインダーを人間の目から解放したいと思っている。」^{*3}と述べています。《無題》は、1979年の「第15回 今日の作家'79展」^{*4}の出品作品です。塗り込んだ布に重ねられた白い布には、油絵具が浸透し滲みが生じています。物質の浸透という現象は、榎倉の制作において重要なテーマのひとつでした。この作品では布や油絵具は絵画の素材としてではなく、物質として提示されています。床へと下る布の設置からは、平面から広がる空間を志向する様子が見えがえます。

*1：桜木町駅前にあった旧中区役所庁舎を転用した建物

*2：企画＝加藤衛、川添登、瀬木慎一、園田敬男、東野芳明、中原佑介、針生一郎、吉沢忠、吉原慎一郎

*3：榎倉康二「(なにがカメラに写るか) —とりあえずそのことが問題—」、『美術手帖』、第356号、1972年6月、91頁

*4：企画＝島州一、高山登、東野芳明、眞板雅文



Kishio Suga

菅木志雄

菅木志雄は、1944年岩手県に生まれました。1968年多摩美術大学絵画科卒業。第8回パリ青年ビエンナーレ（1973年）、第38回ヴェネチア・ビエンナーレ（1978年）、第16回サンパウロ・ビエンナーレ（1981年）などの国際展に参加。個展に「菅木志雄—スタンス」（1999年、横浜美術館）、「揺らぐ体空—菅木志雄 インスタレーション—」（2005年、岩手県立美術館）、「菅木志雄」（2014年、ヴァンジ彫刻庭園美術館）、「菅木志雄 置かれた潜在性」（2015年、東京都現代美術館）など。国内外でのグループ展多数。2016年、第57回毎日芸術賞を受賞。菅は、ものものとの相互の関係や空間の連続性など、ものの本質を問う制作を継続しておこなっています。



《縁帯》1986 / 2015年 石、木 撮影：佐藤毅



「第22回 今日の作家展 (現代美術の黙示録 I)」(1986年) 展示風景
撮影：佐藤毅

〈もの派〉が出てくる土壌を言うと、それまでの美術の内容や概念、認識、制作方法が行き詰まっている状況があり、みんな閉塞感を感じていました。1960年代末にアメリカで始まったアースワークは、基本的に地面に起きた出来事を提示していくことですから、本来アートと考なくてよいひとつの事象です。しかし美術として取り上げられ、その世界観が日本にも波及しました。そして、イメージ、材料、あるいは認識や概念など、物体でない部分も含めてそれはいったい何なのか、本当に必要なかと再考されました。日本の美術のなかで断罪されたのはイメージです。イメージは、人間の気持ち、考え方、感覚を基本とした内容を持っていました。しかし人間のイメージを超えたものが既にあると気付いたら、人間が関わらない物体の存在感が強く出てきたのです。つまり以前からものに付随している言葉や認識を取り払うということがまずおこなわれたわけです。見えるものを見るように見ようということから進んでいかななくてはならないということが、当時のひとつのあり方でした。僕は、ものを見ていけば世界は変わると感じていて、人間が作り出さなくてもものは既にあるという考えを持っていました。ひとつひとつのものを認識すること自体、表現として成立すると考えました。

イメージによって何かをするということ、基本的にしない状態性を考えました。一番ためになったことは、アースワークです。アースワークは、作品と人間の結びつき方がそれほど明快ではないのです。例えば、地面を掘るということは誰でもします。ですから本来的に無記名です。どういう場所でどういうことをしたかという、それ全体が作品になります。どういう状態が一番よいということはなく、時間の中での行為が作品として提示されたのです。人間の行為は、基本的に始まりも終わりもない。ただ何かをした時に、日常からちょっと違う空間に入り込んだという状態性は自分なりに認識します。インスタレーションの場合、劇的な形態感があるわけではなく、ただものを置いていくという配置が主流です。置くこと自体がある種のメカニズムを持っています。ある位置からある位置へのものの移動は、場所の移動でもあります。ものを置くということは、そのものがあつた場所性も含めて持つてくるということです。インスタレーションは、ものをつくるということも含まれているけれど、ものがいかにしてそこにあるかということを示すための行為です。

アクティヴェーションは、制作全てに関連しています。例えば僕が動いた時にものを持っていけば、ものも同時に違う次元に動くことになります。それは、ものも人間も空間も一緒に移動していくという、全体性の問題ですね。横軸の繋がりや空間性と、縦軸の時間の空間性というものがあるのです。過去にあったものを現代に持ってきた時、縦軸の中で移動してきたと考えることができます。人間の目の後ろは過去になるわけですよ。過去からものを引っ張ってきて、目の前に置いて、人間が通り過ぎるまでそれを見るということなんですね。展示会の静的な空間に置いたものと、人間と同時に動いている動的な空間の中でのものは一体何が違うのか、そして過去のもを現実の中でどう見せるか、どういう変わり方をするのかということに

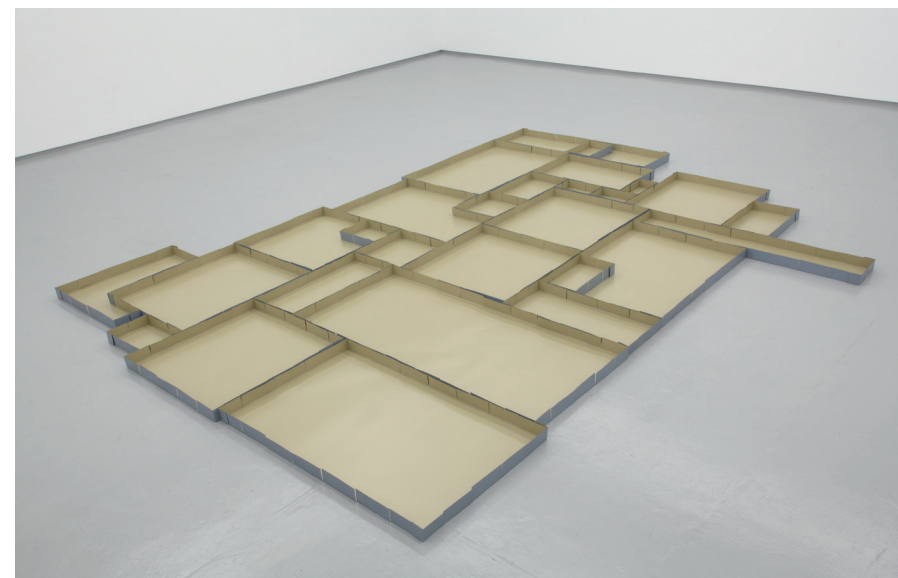
も興味がありました。同じようなものを使っていても必ず違うという側面を見せるある種の操作、それがアクティヴェーションです。

ものをつくることと映像を撮ることは、僕の中では同調性があります。映像は、現実を虚構にしていくパターンですが、時間経過の中でどのように失われていくものがある、どういうものが現れてくるかという、非常に微妙な感覚が重要だという気がしていました。だから、現れてくるものと消えていくものと、常に両端があってどちらにも傾かない、真ん中で何かをやるということです。映画の話や聞くと、自分の思考の中で作りあげて撮る人と、相手の動きに任せて撮る人と二通りあるんですね。僕は、それほど指示はしませんでした。その辺の日常を引きずって、わけのわからない演技をしても構わないという思いがありました。ストイックに、きれいにする必要はないということです。あまり虚構的にやって欲しくない。映像そのもののリアリティが出ればよいのです。でも今撮るとちょっと違うかもしれません。どのように撮るかという問題は大きいと思います。対象よりもこっち側の問題です。だからどういうアングルで、どう撮るかということをもっと追求する必要があると思います。

できるだけシンプルにという考えをずっと持っています。そのシンプルさがどういうリアリティを發揮するかということに非常に興味があります。シンプルにすればするほど、ものの存在感が出るわけです。つまり何が見えるかという問題です。人間は見よう見ようとするけれど、本当に見ているかというそんなことはない。見ようとしなくても見えるものがあるのです。それをどのように見せられるかということを考えてやりたいですね。横浜市民ギャラリーの展示室は、非常にシンプルな空間で天井も高い。場所によって、空間の出来具合が作品を半分くらい規定します。ですからよいアイデアがあつても、本当にその場所に合うかということは何度も再考します。僕は地表をすごく気にしているんです。地面ですね。地表が思考の基準のような感じなのです。だから地表の上下をどうするかという問題があつて、地表の上でどういう種類のものをどれくらいの量置くのかということを考えます。そして、そこに新しい地表をつくる

のか、古いままでいいのかということも、今ちょっと考えています。

2016年7月12日
菅木志雄氏スタジオにて
聞き手：大塚真弓



《スクエアポンド》1986年 カラートタン
撮影：木奥恵三 ©Kishio Suga, Courtesy
of Tomio Koyama Gallery

Akiko Ikeuchi

池内晶子

池内晶子は、1967年東京に生まれました。1993年東京藝術大学大学院美術研究科壁画専攻修了。1998年東京藝術大学大学院美術研究科油画専攻博士課程満期退学。1998年から2年間、文化庁派遣芸術家在外研修員および日米芸術家交換計画日本側派遣芸術家としてニューヨークに滞在。gallery21yo-jにて継続して個展を開催、グループ展に「第6回富山国際現代美術展」（1996年、富山県立近代美術館）、「MOT アニュアル2011 Nearest Faraway |世界の深さのはかり方」（東京都現代美術館）、「秘密の湖 ～浜口陽三・池内晶子・福田尚代・三宅沙織～」(2013年、ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクション) など多数。糸を結ぶ、切るといった行為を繰り返し、天井から吊るしたり壁面に張りわたしたりすることによって、人と空間の関係を考察しています。池内の作品は、空間の広がりや流動を私たちに体感させます。



《Knotted Thread (Pale Pink-From arc-every 4cm-from 242cm high)》
2007年 絹糸

池内晶子 インタビュー

絹糸を使って制作するようになったきっかけ

学部2年生の頃に授業で「メビウスの環」をテーマに制作する課題が出ました。はじめピンとこなかったのですが、自宅の庭で一本の枝に“出会い”、その木をさまざまな場所—自室や自宅のまわり、電話ボックス、小田原の海岸などに持っていき、そこで写真を撮りました。課題の発表時にその木を教室に立て、撮影した写真をいっしょに並べたのですが、その際、木を立てるための支持体として使った糸が空間にあることに、その気配に魅了されました。そこからしばらく糸と木を用いて作品をつくるようになりました。はじめは木と木を支える糸、木の周りに張り巡らせた糸を組み合わせた制作をしてきましたが、そのうちに糸だけにしたらどうかと。作品から木を抜いてみたところ、穴のような空洞が生まれました。

糸も当初は木綿やポリエステルなど、いろいろな素材のものを使っていましたが、糸を結び、触っていくうちに、絹糸のもつ手触りの柔らかさ、光を当てたときの反応のよさ、湿度によって伸縮するところ、人の動きに応じて揺れ動くさまに魅了され、しだいに絹糸のみで制作するようになりました。

後になってみれば木と出会い、ともに時間を過ごすことが、糸を結ぶこと、時間・記憶・意識の領域とどこかでつながると感じっていたのかもしれない。また、もともと絵を描いていたので、糸を張りめぐらすことで空間のなかに線を描くような感覚もあったように思います。

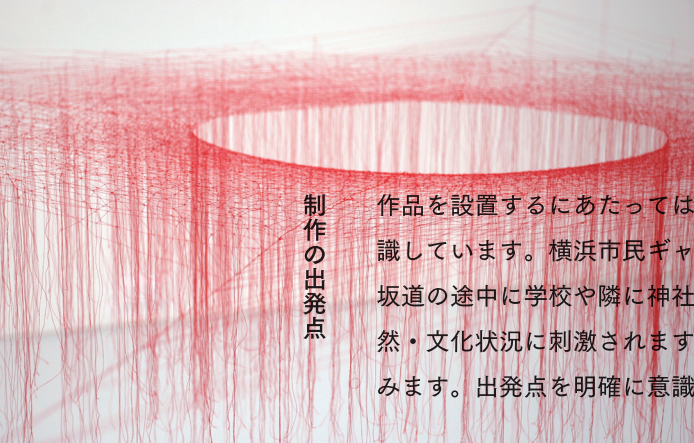
本展出品作品（新作）について

今回は2室で展示することを考えています。ひとつは昨年 gallery21yo-j で展示した作品*を持ってくることにしましたが、展示の話をいただいたことで、私のなかに新たな思いが生まれました。「いま、いるところ」によって作品は変わるものだと思います。gallery21yo-j で展示したとき、作品は完結したと思っていましたが、横浜市民ギャラリーに来てみると、現在までの時の経過を加えたい、広げたいという思い・イメージが湧いてきました。今まで過去の作品を再展示する際にはあまり手を加えることはありませんでしたが、今回は自分のなかで新たに動かさずような予感があります。作品に対する自分の接し方が変わりつつあるのかもしれない。

もうひとつのほうは、展示室の向かい合った壁の上方にそれぞれ2本の支軸の糸を設置し、その間に（別の）糸を（支軸の糸に）結びつけ、弛ませながらジグザグに往復して垂曲線が重なる作品を考えています。この形式は何回か展示していますが、支軸の糸に結びつける数や結び目と結び目との間隔によって新たな形となります。そして、最終日に床すれすれに垂れ下がっているところを一本ずつ切っていきます。



パフォーマンス《Knotted Thread-White-From arc every 330cm high-every 1cm-2010》
2010年6月27日 撮影：坂田峰夫



制作の
出発点

作品を設置するにあたっては、自分がこの場所に立つに至るまでの身体的感覚を意識しています。横浜市民ギャラリーは、駅から来て坂を上がり、丘の上にあること、坂道の途中に学校や隣に神社があり、近くにお寺があること、そうした、いわば自然・文化状況に刺激されます。この土地からわきあがってくるものに触れようと試みます。出発点を明確に意識するのは難しいですね。

制作する時に
意識して
おこなっていること

作品になろうとする「それ」に、従わざるをえない心境になります。自身の身体と心を使って、普段の感覚を鋭敏にし、空気を吸い、吐き、人々や、土地のもつ思いや歴史やなにか見えないけれど漂っているものと、作品になろうとするものの意思をつなげていくことかもしれません。

クロージングイベント
糸を切る

丘の頂上にあるギャラリーの、1階の展示室で作品を設置します。制作過程の結ぶ行為そのもの、また私が関わった時間や記憶そのものが宙吊りにされます。ここに来てくださる方、周辺の方、土地自体の時間や記憶にどのように重さねられるのか、接触できるのか、それらを浮かび上がらせることができればと思います。糸を切った後の作品は分断されます。切る・切らないにかかわらず、作品は場所や状況とともにあります。展覧会中に人のまなざしを受けたり、時間の経過で作品は変化したりするので、始まりと終わりとは違うものになっているような気もします。

榎倉康二と〈もの派〉の動向

榎倉先生からはきびしくも優しいまなざしを感じていました。そのまなざしのなかに自分の表現したものがなんなのか、その頃感じていた不確かなものなどについての肯定があって、勇気づけられたと思います。制作そのものについてよりも、他の学生とともにあった対話・ふと湧いてくる話など、接するなかで、ものの見方や考え方、世界との関わり方、自分の感覚を研ぎ澄ませていくことについて教わったと思います。〈もの派〉についてあまり語ることはできませんが、私が制作を始めた頃には既に〈もの派〉の作家たちが活躍していて、少なからず影響を受けたと思います。一方で一時期アメリカに滞在していたために実際に目にする機会も多かったリチャード・セラ、レイチェル・ホワイトリード、フェリックス・ゴンザレス＝トレスなどに共感を覚えました。〈もの派〉は西洋の乾いた土壌とは違う、東アジアの日本の地で、この土地の歴史や政治的な動きを作品に転化していく過程で、日本の周辺で調達できる鉄や石や土といった素材が必要だったのかなと思います。私の制作に立ち返ると、湿、身体的な皮膚感覚、皮膚と物質、物質と人が成す空間、社会との関係、そういったところをみつめてきたであろう榎倉先生の影響が強いと思います。

2016年7月22日 横浜市民ギャラリーにて
聞き手：大塚真弓

Takayuki Suzuki

鈴木孝幸

鈴木孝幸は、1982年愛知県に生まれました。2007年筑波大学大学院芸術研究科修士課程総合造形分野修了。菅木志雄が審査員を務める大黒屋現代アート公募展で2009年に大賞を受賞。個展に「那珂川のほとりで [place/linear]」（2010年、板室温泉大黒屋サロン）、「川をつくること、で [place/bottom]」（2012年、Gallery HAM）、「資本空間—スリー・ディメンショナル・ロジカル・ピクチャーの彼岸 vol.4 鈴木孝幸」（2015年、ギャラリーαM）、グループ展に「中之条ビエンナーレ」（2009 / 2011 / 2013 / 2015年、群馬県中之条町）、「境界」（2013年、倉庫現代美術館）など多数。鈴木は、様々な土地を訪ね、地面を掘る、物質を選び積み上げる、削るといった一連の行為を作品として提示します。鈴木作品は、土地や物質の側面を開示し背景にある自然の存在を暗示します。



上：《heaping earth -472》2015年
釘、テグス、各地にて採取した石、木、陶器片、ガラス片、金属片等

下：《heaping earth -423》2011年
石、焼いた石 中之条ビエンナーレ
京塚温泉会場（群馬）



*《Knotted Thread-white-φ14cm-h110cm》



現在の制作に
いたる原点

制作らしい制作を始めたのは、大学に入ってからですね。僕は田舎の出身で、身の回りに川があったり石がゴロゴロしていたりする場所で育ったので、そういうことだったら何かできるんじゃないかと思って、ものに触れる制作をはじめたのが最初です。絵画も彫刻も通っていません。

〈もの派〉の動向

大学の時に、こういう制作を始めると〈もの派〉の動向というのは耳に入ってきました。〈もの派〉に影響を受けた部分はもちろんあるのですが、1960年代後半の世界的な動き全体に、この延長線上に何かできるんじゃないかと感じた部分があります。もの派に特化したわけではないですが、ものと人の関係、とてもシンプルな基本的な部分から何か作品が生まれてくるというか、美術の中で見ることを揺るがすような何か生まれてくるんじゃないかという可能性みたいなものを感じた部分はあります。

大黒屋
現代アート
公募展

石と石の間に木を引っ掛けた小さな作品*1を5点つくって出品しました。大賞を受賞した作家は、受賞した翌年に個展のチャンスがあり、現在も展示されている作品*2はその関連として設置した作品です。制作したのは2010年で、ものと場所、ものと肉体、といった一対一の間を表現した作品です。特別な事情がなければ、基本的にひとりで作っています。積み上げるにしてもその過程が自分にとってものすごく大事で、手伝いをしてもらわずにやることが多いです。

屋外と屋内の制作の違い

屋外の場合は、場所を決められた芸術祭に参加することが多いです。その時は、その土地のイメージや先入観などから離れて、何か本当の土地そのものを提示しようと考えています。屋内で作品を展示する場合は、ピンポイントではなくて、もう少し抽象的な場所についての作品をつくることが多いです。屋外の場合、基本的にルールはないわけですね。屋内で展示する場合、美術館だったりギャラリーだったりという場所は、制度や色々なものがあるので、自分がテーマのひとつとする境界という部分と関わるかなと思います。

タイトルに
付された番号

つくるという行為を通して、ものや場所のイメージ、先入観と違うものをつくりたい、提示したいという時に、人が肉体的に行為をすることで、何か別の側面を提示できるんじゃないかと思っています。付けられている番号は、全て行為の順番です。1から始まり、このシリーズの何番めの行為かということを表しています。

制作する時に意識しておこなっていること、おこなわないこと

意識しておこなっていることのひとつは、作品を極力その場所に合わせることです。空間が再構成されてまた新たな場所となるようなことを心がけています。初期の頃は、最もシンプルに、石を積み上げるとか土を盛るということをやっていたので、接着をするといった制作過程の行為を隠すことは意図的に避けていました。けれど今、少しずつ意識が変わってきています。例えば、接着することに意味を見い出せるのであれば、今後接着をすることもあるかもしれません。

本展出品作品(新作)
《続つて海を歩く [place/coast]》2016年

これまでの作品では、石を積み上げるとか土を盛るとか、地面の上に重力で立ち上がるものをものすごく意識していました。それは歩く場所というか、地面に足がついている場所での制作としておこなっていた部分がありました。その延長線上で歩けない場所というものに興味を広がり、今回は海と陸の境界線でものを拾って、そこから作品をつくろうとしています。ひとつの境界を別々のものとしてではなく、ひとつの場所として提示できたらと思っています。



制作風景 2016年

制作に反映する
身体感覚

身体感覚は、一貫して僕の中にある感覚です。ただ身体感覚だけでは語り得ないものがあるというのが最近の認識です。海は行けない場所、陸は行ける場所というそれだけではなく、俯瞰する視点を人間は持っているのです。そうすると同じ場所が全く違った場所として見えるわけですね。その色々なものが複合された状態でひとつの場所として何か提示できないかなと思っています。身体と言えかわかりませんが、俯瞰した状態を意識して制作したいと思っています。

場所の固有性

抽象的な場所という言い方をしたのですが、制作をする特定の場所があります。その場所というのは、ざっくりと海と陸の境界と言うこともできるし、実際の場所そのものという言い方もできるので、ニュアンスとして難しいところですが、自分が関わった土地の固有性は示したいと思っています。その場所、土地でものを拾ったということは、個別の、実際の事象ですが、それを作品ではもっと抽象的、もっと広い意味で語りたいと思っているからです。個別の事象と、全体的な話という二つのことを同時に含ませたいという思いがあります。

2016年7月25日 横浜市民ギャラリーにて

聞き手：大塚真弓

謝辞

この展覧会を開催するにあたり、多大なご協力をいただきました
次の個人、関係機関に深く感謝申し上げます。(敬称略)

菅木志雄	榎倉充代	世田谷美術館
池内晶子	千葉成夫	小山登美夫ギャラリー
鈴木孝幸	斎藤和土	gallery21yo-j
	熊谷伊佐子	横浜美術館
	佐藤毅	
	椎木静寧	
	加藤絢	
	池尻豪介	
	上村徹也	

新・今日の作家展2016 創造の場所—もの派から現代へ

2016年9月22日(木・祝)～10月9日(日)


10:00～18:00(入場は17:30まで)

横浜市民ギャラリー 展示室1、B1

入場無料 会期中無休

主催：横浜市民ギャラリー

(公益財団法人横浜市芸術文化振興財団/西田装美株式会社 共同事業体)

助成：芸術文化振興基金 

協賛：アサヒビール株式会社

後援：横浜市文化観光局

学芸担当：大塚真弓、森未祈、齋藤里紗

デザイン：須山悠里

印刷：山陽印刷株式会社

映像制作：播本和宜

編集・発行：横浜市民ギャラリー

〒220-0031 横浜市西区宮崎町26番地1

Tel. 045-315-2828 Fax. 045-315-3033

<http://ycag.yafjp.org/>

©Yokohama Civic Art Gallery 2016

表紙作品：池内晶子

《Knotted Thread-52knots-north-south-catenary-h330cm》

2015年 絹糸 撮影：椎木静寧 写真提供：gallery21yo-j

関連イベント

アーティストトーク

9月22日(木・祝) 14:00～

出演：池内晶子、鈴木孝幸

会場：横浜市民ギャラリー 4階アトリエ

上映会《存在と殺人》

(1998-1999年 監督・脚本：菅木志雄 86分)

10月1日(土) 14:00～

会場：横浜市民ギャラリー 4階アトリエ

講演会「もの派の造形思想の中核としての菅木志雄」

10月2日(日) 14:00～

出演：千葉成夫(美術評論家、中部大学教授)

会場：横浜市民ギャラリー 4階アトリエ

クロージングイベント

10月9日(日)

菅木志雄 アクティヴェイション 14:00～

池内晶子 “絹糸を切る” 16:00～

会場：横浜市民ギャラリー 展示室1

学芸員によるギャラリートーク

9月25日(日) 14:00～

会場：横浜市民ギャラリー 展示室1、B1